幼稚園、保育所におけるケース・ワーク（三）

立教大學教授　森脇　要

ケース、ワークといふ技術が心理的缺陷或は疾患の治療の方法として發展して來た理由は心理的疾患といふものは醫學的疾患に較べて非常な特殊性を持つてゐるといふ點にある。醫學的疾患に於ては、その原因が、環境にも關係があるとしても主として本人の身體的狀態にある。それ故、本人をその環境から隔離し、入院させて、その疾患を治療すれば、本人が前の環境に歸つても、この前の環境に復歸した事自體の爲めに再び同じ疾患が起きる事はない。かりにあるとしても非常に少ない。それ故に、病人をその環境から隔離して治療する事が可能である。然るに心理的缺陷に於ては事情は異る。一體心理的疾患は、人間がその環境にうまく適應出來ない事から起きる。或は環境に適應出來ない事自體が疾患なのである。それ故今彼が置かれてゐる環境を離れては治療の方法は考えられない。假りにその患者をその環境から隔離して、新しい好ましい環境に置く事により、その疾患が治療したとしても、もとの環境に入ればやはりその環境に對しては適應出來ない事は同じである。いや多くの場合に於ては、この環境からの隔離といふ事も困難である場合が多い。身體はその環境から離れても心はなか〳〵離れられるものではない。それ故に心理的疾患の治療の爲には、どうしてもその本人の置かれた環境に於て、その正しい適應の方法を見出させるといふ方法をとらねばならぬ、その環境を矯正したり、本人の態度を改めたりして、何としても本人と環境との新しい調整を作らねばならぬ。本人の環境に對する新しい適應の方法を考えてやらねばならぬ。かくの如くその本人の置かれてゐる環境に於ける治療の方法が考え出されねばならぬ。こゝに醫學的疾患に較べて心理的疾患の治療の困難性の一の原因があるのである。この爲にケイス、ワーカーといふ一つの職能と技術が生れる所以がある。それ故ケイス、ワーカーの仕方は、その本人のよつてつくられた環境に對して心理的にうまく適應する方法を與えてやる事である。その爲には環境を分析し、本人の心理を考える事によりそこに新しい適應の方法の發見

或は發明が生じなければならぬ。かゝる新しい環境適應の方法の發見或は發明こそケイス、ワーカーの仕事でなければならぬ。

私は前號に於て、かゝる仕事を遂行する爲のケイス、ワーカーの一つの技術として、ケイスワーカーが患者の感情にいたづらに同調してはならない所以をといたのであるが、尙この點について一、二考へられる點をのべたいと思ふ。

ケイス、ワーカーは問題の中心が何かをよく考え、その中心點をはずしてケース、ワークを擴げてはならぬ。この事はケイス、ワーカー一般に通ずる事ではあるが、幼稚園、保育所のケイスワーカーにとつては特に大切である。幼稚園や保育所のケイス、ワーカーは、子供の保護教育にその中心點がおかれ、その事を中心にケース、ワークを行ふべきであつて假令その家族の中にケース、ワークの對象になる事があつても、子供に直接に深い關係のない事は、よしその事がケースワークとしてはどんなに興味深い事であつても、そのケースワークの範圍を拓げてはならぬ、ケース、ワークを受ける側の直接の關心事でない事に深入りすると、その家族は、そのケイス、ワーカーに興味と關心を失い、彼から離れてしまう事になる。例へば保育所に長く缺席してゐる子供がいるとする。家庭訪問してどうして缺席してゐるのかと思ふと、それは經濟的理由である事を發見する。その場合にケイス、ワーカーとして爲すべき事はどうすればこの子供を再び保育所にあげる事が出來るかといふ事が中心問題で、その爲には兒童委員に連絡するなり、村役場、町役場或は區役所に連絡するなりして處置兒童としての取扱いを受ける方法を敎え、又薦めるべきであつて、假令その兩親間に心理的な問題があり、それの解決がケイス、ワーカーとしてどれ程面白い問題があつても、そこまで手を擴げることは好ましくない。あまり子供の保育所の缺席に關係のない事をつき進んで聞きたゞすと母親なり、父親なりは、このケイス、ワーカーを面倒くさがるであらう。そして、このケイス、ワーカーと接觸する事を嫌がり、ひいては子供を再びこの保育所に出す事にすら關心を示さなくなるであらう。彼等の中心問題は子供を再び保育所に上げるのにはどうすればよいかといふ事であるからである。

ケイス、ワーカーは一應は患者や依賴人の氣持、立場、主張に同調しなければならない。はつきりした證據があつて、患者の氣持や立場や主張が間違つてゐるといふ事がわかるまでは、ケイス、ワーカーにとつて大切な事は相手に心を開かせ、充分その意見をのべさせる事にある。その爲には心安い氣持でケイス、ワーカーに應待させる事が大切である。ケイス、ワーカーが始めから患者や依賴人の云い分が間違つてゐると決めてかゝつては、彼等はケイス、ワーカーに話すことに興味を失つてしまふであらう。ケイス、ワーカーに興味を失はせてしまつてはケース、ワークを行う事は出來ない。彼の立場に立ち、彼の主張を充分聞いた上で、徐々にそれに對

するケイスワーカーの批判をのべ、彼等の誤りを改めて行くべきである。例へば幼稚園や保育所で盗癖の疑いのある子供がゐるとする。ケイス、ワーカーはこの子供の矯正の爲に家庭の協力を求めに出かける。母親は、うちの子供に限つて決してそんな事はしないと主張するかも知れぬ。この主張は、母親が子供の盗癖については全然知らぬ爲に、かゝる主張が爲される事もあらうし、或はこんな事を肯定しては家の名譽に關すると考えて否定してゐるかも知れぬ。どちらの場合でもケイス、ワーカーが、この母親の主張を否定して、その子供が如何に盗癖のある子供であるかを眞正面から證明してかゝつては相手を怒らせるに終つてしまうであらう。相手の云い分を充分よく聞いた上で徐々にかゝる行爲は、どんなよい家庭にもおこり易いこと、早期に心がけるならば、癒り易い事、その爲には母親の責任の大切な事等いろ〳〵と話して母親に安心を與へつゝ問題の本質に入つて行く事が大切である。或はよし盗癖の事實を肯定した場合にも、その原因は近所の悪友の影響であると主張した。母親自體の金錢の仕末の悪い點や、子供に對する注意の不足等自分の責任の點は否定するかも知れない。かゝる場合に、母親自體に責任があると決めつけたのではケース、ワークにならない。彼女に同調して充分彼女に語らせてから徐々にケイス、ワーカーの考へものべて行くべきである。決してあせつてはならぬ。　には相手の云ひ分だけ聞いてその日はそのまゝ歸る程の餘裕ある心持が大切である。

又ケイスワーカーにとつて大切な事は、彼の仕事は決して相手を非難したり、又裁いたりする事ではなく、どこまでも彼等の困難を扱うといふ事である。この心持は決して忘れてはならない。子供を虐待する親があるとしてもケイスワーカーの仕事はその親を責める事ではない。何故にこの子供と親とがうまく行かないか、その原因は何かとさぐり、この原因をとりのぞく事によつてこの親子の困難をとりのぞく事にその努力が集中さるべきである。單なる非難や裁きは相手の心をかたくなに閉じさせる外何の役にもたゝない。

又ケイス、ワーカーは時には客觀的な困難をとりのぞく事によつて、心理的な問題に迫る事が出來る場合もある。例えば幼稚園や保育所に來てゐる子供が段々暗くなり元氣がなくなり、いらいらして來たとする。この場合ケイス、ワーカーはその家庭に行つて一言二言話しその家の樣子を觀察して、これは病人が出來て經濟的に逼迫したために家庭不和が多くその爲に家中がたのしくなく又暗くなつたのだと見てとつた場合、出來れば生活保護や醫療保護等の手段を先づとつて、親を一先ず安心させ、徐々に、兩親の不和がどんなに子供に悪い影響を與えるかを話す方がはるかに効果的である。大きな經濟的困難を背負つてゐる時に、只兩親の親和をといてもおそらくはあまり大きな効果はないであらう。